

12月29日 ルカによる福音書2章15～20節

「一夜明けて」

今日の聖書箇所は、クリスマスに読まれる定番の箇所です。「羊飼い」に対して、イエス様誕生の知らせが届けられたのですが、ここでは異邦人に対する宣教が意識されていました。安息日も休むことなく働くことで罪深いとされていた羊飼いに対しても「あなたのために救い主が生まれた」と語りかける天使の言葉は、ユダヤ人以外にも神様の救いが開かれているという、大きな希望の言葉でした。だからこそ羊飼いたちはその体験を人々に証しました。

イエス様の母マリアもその羊飼いたちの言葉を聞いて、自分の身に何が起きたのかをより理解することが出来たようです。もともと天使ガブリエルから受胎告知を受けて「お言葉通りになりますように」と、従順な姿勢を見せたマリアでしたが、その身に起きることがどういうことなのか、そのすべてを理解していたわけではありませんでした。裏面に載せているマリアの賛歌では、自身を用いて業をなす神様に対する賛美の言葉が並べられているのですが、生まれてくる子どもが救い主であるという理解には至っていませんでした。だからこそ、羊飼いたちの言葉と自分の身に起きたことを照らし合わせて、イエス様のことを理解したのです。

しかし、救い主誕生の出来事はこれで「おしまい」です。イエス様の誕生から一夜明けて、一週間たって、何年たって、結局イエス様がメシアであると信じる人はいなくなっています。だからこそイエス様は、一人で洗礼者ヨハネのもとに行き、その後新たに弟子たちを集める必要がありました。その理由としては、イエス様の誕生が、メシアの誕生のしるしとしてはあまりに「小さすぎた」ということが背景にあるようです。

元々メシアは、ダビデ王の末裔として生まれると預言されていましたが、「どこから来られるのか、だれも知らない」と理解されるほど神秘的な存在であるとも考えられていました。だからこそ、メシアが誕生した時には何か特別なしるしが現れると考えられていたようです。しるしという言葉は奇跡と言い換えてもいいほどに、不思議な出来事のことを指しています。しかし、羊飼いたちが目にしたのは、貧しい馬小屋の飼い葉おけの中で眠る一人の赤ちゃんで、預言の成就ではありますが華々しさに欠けるしるしだったのです。

ただ、何もなすことができないほどの小さな命から、生まれたばかりの頼りない、今にも失われそうな小さなイエス様によって、まさにかからしだねの一粒が大きな木となるように、十字架と復活による救いと希望が生まれることになるのです。その大きな恵みは、クリスマスの夜にはまだ誰にも知られることなく、イエス様の公の生涯、ヨハネによる洗礼から始まるすべての宣教の歩みまで、しばらく伏せられることとなります。

クリスマスから一夜明けた私たちの心は、もう次の楽しいことを探し始めているのでしょうか。それとも、たった一夜の礼拝から、一粒のからしだねが大きな木となるように、私たちの日々の礼拝や体験から、私たちの信仰と希望はより大きく育っていくことができるのでしょうか。そうであると理解していればこそ、私たちのために救い主が生まれたと、それが「私たちのことである」という喜びの思いによって、私たちは満たされることのできるのです。

クリスマスが終わり、一年が終わるこの時、神様から受けたすべての恵みに感謝をしながら、共に新しい年に歩みだしていきましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書 2 章 15～20 節

- 15: 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

ルカによる福音書 1 章 46～55 節（マリアの賛歌）

「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。身分の低い、この主のはしためにも 目を留めてくださったからです。今から後、いつの世の人も わたしを幸いな者と言うでしょう、力ある方が、わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。その僕イスラエルを受け入れて、憐れみをお忘れになりません、わたしたちの先祖におっしゃったとおり、アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」